

黒羽芭蕉の館だより ⑬

奥の細道シリーズ切手2

「広報おおたわら」1月1日号の本欄に続き、今回は「奥の細道シリーズ」の切手シート(全20枚、昭和63年発行の内、第2集と第3集を紹介し

ます。第2集は那須から芦野にかけてで、1枚目には時鳥の絵と芭蕉の句「野を横に馬牽むけよほととぎす」が記されています。句意などについてはすでに「広報おおたわら」平成23年11月1日号の本欄で触れたため、略しますが、芭蕉が黒羽(余瀬)を出立し、黒羽藩城代家老浄法寺図書から



奥の細道シリーズ切手 第2集 那須～芦野

提供された馬で殺生石に向かう途中、馬子に短冊を所望されてこの句を詠んだことが、『おくのほそ道』には記述されています。

2枚目は、柳陰の絵と芭蕉の句「田一枚植て立去る柳かな」です。句意は、西行法師ゆかりの柳の陰にほんのしばらくのつもりで立ち寄り、感慨にふけていたが、気がつくとも早乙女たちは一枚の田を植え終わって立ち去って行くので、思わず時を過ぎたものだ、思いを残しつつ私も柳のもとを立ち去ることだ、となります。季語は「田植」で夏です。

第3集は須賀川～福島で、1枚目は栗の花の絵と芭蕉の句「世の人の見付ぬ花や軒の栗です。句意は、世間の人が目にとめないこともかまわず、軒先の栗に花が咲いている、となります(季語は「栗の花」で夏)。須賀川(福島県須賀川市)滞在中に訪れた僧可伸(俳号は栗斎)の庵での挨拶吟で、可伸の閑寂な隠栖生活に対する共感が表現されています。

2枚目は、早苗の絵と芭蕉の句「早苗とる手もとやむかししのぶ摺」です。句意は、ここで忍ぶ摺が行われたのは昔のことで、せめて早苗をとる早乙女の手つきにその当時の所作を偲ぶことにしよう、となります(季語は「早苗」で夏)。

■問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 ⑳

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、ふれあいの丘の駐車場入口の左側に置かれています。

がっしりとした人の上半身。そこから大きく力強い手が両側から伸びてきて、円錐状のものをしっかりと支えています。タイトルにブラスホルンとあるように、それは真鍮(しんちゆう)でできた管楽器、ホルンのバルブを右手で押さえ音楽を奏でている姿です。



Brass Horn (ブラスホルン)

木裳 耕二 2001年

この作者の作品には、楽器

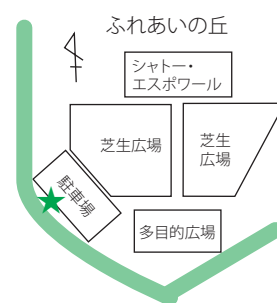


木裳 耕二氏

を演奏する姿を題材にしたものが多く見られます。鳴っている音は3秒もするとすぐ昔のものとなり色あせ忘れ去られることの連続で、「音は時間をただよって過去と未来を交差する」ものと作者は捉えています。一方、「石はそこにたたずんで空間を見ている」ものとしています。こうした音、音楽に対する感覚をこの作品で表現しました。

作者は、1970年福岡県生まれの木裳耕二氏。1989年九州造形短期大学を卒業し、同年福岡県美術展で福岡県知事賞を受賞。1993年の二紀展奨励賞受賞を皮切りに同展で入賞を重ね、現在二紀会員。2006年には不運にも交通事故で障害をもつ身となってしまいましたが、果敢にリハビリ、創作活動に取り組み、2010年からは二紀展への出品を再開しています。

設置場所案内図(★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718